

No.661 (改題621号)
2025年
2月26日(水)

新社会兵庫



週刊 新社会

発行所: 新社会党
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-10 三成工業ビル3F
TEL. 03(6380)9960 FAX. 03(6380)9963

新社会党兵庫県本部 神戸市中央区中山手通5丁目2-3 ☎078(361)3613 FAX078(361)3614 毎月第2、第4水曜日発行 購読料月400円(1部200円)郵便振替:01120-7-16805

客待ちのタクシードライバーに訴えるかい正康さん=2月10日、JR三ノ宮駅前



街頭でトラックやタクシー、バスのドライバーに訴える時のかい正康さんは、仕事のきつさや大切な方を自らの経験で身に染みて分かっているから、マイクの声にはいっそう力がこもる。タクシードライバーには必ず「運転手の誇りや乗客の安全を軽んじるライドシェアは絶対反対」を訴え共感を呼んでいた。

ドライバーに熱い訴え

かい正康さん兵庫遊説
各地の集会や街宣行動に奔走

2.9
2.13



西神戸地区を中心に参加者があり、それぞれの課題にもとづく政策や取り組みの必要性を語り、かい正康さんに期待を寄せた=2月12日、神戸市長田区

22年間のトラックドライバーとしての経験を持つ47歳のかい正康さんは、エネギッシュだ。今回の兵庫入りの間も、一刻も惜しむように各地で計

今年7月に予定される参議院選挙で、社民党比例区から立候補を決意しているかい(甲斐)正康さん(新社会党市民運動委員長)は、昨年4月の新社会党全国大会での決定を受けて以降、精力的に全国を走り回って準備を進めてきている。そのかい正康さんが昨年11月につき、2度目の兵庫遊説を2月9日から13日の5日間に行い、各地で支持の拡大を訴えた。

広がる激励と支持の輪

を重ねた。

9日は前夜集会があった奈良県天理市を朝早くに出発。まずは加古川市で地元の加古川、高砂の両総支部の役員らと懇談。午後は姫路市での党西播磨会議(姫路、揖龍、神崎、宍粟の総支部・支部)の役員と「囲む会」を持ち、自己紹介ののち、訴えるべき政策などについて意見交換を行った。

翌10日は、JR三ノ宮駅の山側で地元のおわはら富夫神戸市議と共に早朝の街頭宣伝。終了後は



写真①西宮のカフェで「かい正康と語る会」=2月10日、②灘区で「かい正康を囲む交流会」=2月10日、③加西市でこの社会を考える集い=2月11日、④垂水区でバス労働者との交流=2月13日



西宮市に移動し、カフェを借り切った「かい正康さんを囲む会」に参加。ランチも共にしながら

き、部落解放加西市民共闘会議主催の「かい正康さんと共にこの社会を考える集い」に参加。集いでは

13日は北総支部での党員との懇談と支持者宅回りからスタート。須磨区での支持者宅回りを終えて夕刻からは長田区で街頭

かい正康さんの日々の活動を発信中



後藤又兵衛顕彰碑

(姫路市山田町)

後藤又兵衛は、安土桃山時代から江戸時代初期に数々の軍功を挙げた武将。出生については、永禄3年(1560年)4月10日に神東郡山田村(現・姫路市山田町)に

生まれたと江戸時代の地誌『播磨鑑』に記されている(他説もあり)。幼少の頃に父を亡くしたため、黒田官兵衛に養育された。身長は6尺(約180cm)を超えるという巨漢であり、槍の名手として知られる。「黒田24騎の雄」とうたわれ、具体的な足跡が現れるのは天正14年(1586年)の九州攻めの頃からで、関ヶ原の戦いにも従軍。その後、福岡県大隅城の所領



槍の名手として知られる後藤又兵衛の顕彰碑が出生地とされる姫路市山田町の福田寺境内に建つ

1万6千石を与えられた。槍の穂先の形に仕上げられている。

なお、又兵衛の末裔の一部は、今も山田町に在住のこと。(森山)
【X】神戸から車で60分。電車(神戸電鉄、北条鉄道)で90分と北条からバスで20分。姫路からバス(北条行)で50分。

水脈

妄言じみた発言にはすっかり馴らされたとはいえず、それはないでしよ!というような言辭がまたまたランプの口から飛び出した。ガザをアメリカが「引き取る」と言うのだ。アメリカがガザを引き取り、復興を図る?!だが、その前にガザの住人、パレスチナの人々はエジプトやヨルダンに移住しなければならぬ。要するにガザの人々は自分たちの土地を離れなければならない。そんなことを人々が納得するのなら、1947年の国連分割決議以降ずっと続いていた「帰還」を求めろパレスチナの人々の闘いはいったい何だったのか?ランプが「ガザ所有」を言い出したのは、訪米したイスラエルのネタニヤフとの会談(2月4日)の後だった。ランプとネタニヤフがどこまで気脈を通じていたのかは定かではない。だが、パレスチナの地からパレスチナ人を追い出した後にそこに入ってくるのはイスラエル人に決まっている。パレスチナは100%イスラエルになる。シオニストは大歓迎だ。でも、これは民族浄化に他ならない。アラブ諸国はもう、さすがドイツ、フランス、イギリスや国連クテレス事務総長の批判も当然だろう。さて日本政府、わが石破政権の対応は?

新旧バトンタッチに 140人が大きな激励

つづき徳昭・いちのせ剛 新春の集い



140人の参加者の前で6月の市議選に向けた決意を述べるいちのせ剛さん＝2月11日、尼崎市

つづき徳昭尼崎市議から後継者のいちのせ剛さんへバトンタッチする「新春の集い」が2月11日、尼崎市内で開かれ、140人が参加した。

集いには、松本眞尼崎市長、丸尾まき兵庫県議、梶川みさお宝塚市議、あわはら富夫神戸市議らが来賓として参加し、それぞれから激励のあいさつを受けた。あいさつでは「政治の流れが、デマと脅迫によって変えられようとしている。今こそ民

主主義を守る闘いを広げよう」と、先の兵庫県知事選での百条委員会などへの誹謗・中傷に警鐘を鳴らす言葉が多く語られた。JP労組兵庫連協の上村議長は「組合としていちのせ剛君を強く後押ししたい。彼に期待している」と激励した。

その後、あいさつに立つつづき徳昭市議は「市議在任20年間、地域の皆さんを支えられこれまで続けてこられた。皆さんの支えをぜひいっしょに」と述べた。

集いは地域の人たちの踊りやくじ引きなどで盛り上がり、暖かい雰囲気の中で終わった。

ゲストの漫談家、河内亭九里丸さんの漫談から「いちのせ後援会」とかけて何と解く。「米屋」と解く。その心は、「一票の重さを知っています」。この言葉通り今後ひとつひとつの積み上げを大切にしていこう。(尼崎・H)

■終わらないフクシマ 福島原発事故から14年のついで「放射能からの避難の権利」◎3月2日(日)13時30分◎県加古

は含まれていない。

日々の暮らしに欠かせない食料品や高熱費の値上げが止まらない。コブコブに買い物に行く、春キャベツ2分の1玉3886円、白菜4分の1個214円、兵庫県産こしひかり5キロ4622円など、軒並み値上げである(2月上旬)。帝国データバンクの見通しでは、今年の飲食料品の値上げは前年を上回り、2万品目に達するという。しかし、政府の消費者物価指標で「生鮮食品」は除外されており、国民感覚とは乖離している。

こうして、家計2人以上の消費支出に占める食費の割合を示すエンゲル係数は、昨年28.3%に上り、43年ぶりの高水準となった。エンゲル係数は数値が高いほど生活に余裕がないことを示す。生存に直結する食費が最も削りにくいものだ。逆に所得が増えるほど食費の割合は低くなり、生活レベルは向上する。

私の主張

昨年の連合の賃上げは5.1% (ベア3.5%)、中小労組は4.45%。厚生労働省が昨年8月2日に発表した民間主要企業の賃上げ集計は1万7415円、計は1万7415円、5.33%、いずれも前年を上回った。しかし、この集計は資本金10億円以上、従業員1千人以上の労働組合がある348社を対象としたもの。中小零細企業や非正規労働者

て5%以上、中小組合は1万8千円、6%以上とした。芳野友子連合会長は今春闘について、「賃上げの流れを定着させ、そのすそ野を中小企業や労働組合のない職場まで広げることが最大のミッションだ」と強調する。しかしそのためには、労働者の7割を雇用する中小企業や4割弱を占める非正規労働者が春闘の主役になる必要がある。

職場に労働組合がなく(100~999人の企業の組合組織率9.9%)、99人以下は0.7%)、最賃すれすれ働いている者にしてみれば、「賃上げ要求1万8千円」と言われ

し、下請けで成り立つ中小企業は大企業に「価格転嫁」を阻まれ、そのしわ寄せが中小零細・非正規雇用労働者に押し付けられているのが現実だ。

この状況を変える闘いとして、注目されているのが「最低賃金1500円以上」の取り組みだ。石破内閣も唱える「2020年代に最賃1500円」を達成するには毎年7.3%、およそ90円の引き上げが必要となる。もうひとつが、今年3年目を迎える首都圏の非正規春闘実行委員会の取り組みだ。ストライキを背景に28組合が180企業、10自治体

運動提起が見えない連合春闘 切実な非正規労働者の賃上げ

25春闘を前に、大同生命保険が全国7千社の中小企業経営者に実施した調査によると、中小企業の賃上げ対応が二極化している。指摘する。24年に賃上げしたと回答した企業は58%で前年調査から3ポイント増加している。25年の賃上げ実施については、賃上げ予定33%、検討中36%、賃上げ予定なしが31%となっている。大企業と中小企業、正規と非正規、男女間などの賃金格差は依然大きい。

そんな状況下で2025春闘は始まっている。連合の賃上げ要求は、ベアと定昇を含め

問題は、掲げた要求を実効性あるものとする。ナショナルセンターとしての運動提起が見えないことだ。経団連や政府に「価格転嫁」を「お願い」するだけではなく、労働組合の主体的な闘いが問われているのだ。かつて「狂乱物価」といわれた1974年春闘では、ストライキを背景に32.9%の賃上げを実現し、年金の物価スライド制を導入させた。

いま大企業は過去最高益を更新し、内部留保は24年3月期で539兆円にのぼる。しか

最後に触れておかなければならないのが、今年1月8日に厚生労働省が公表した「労働基準関係法制研究会報告書」である。この報告書は、昨年1月16日の日本経団連の「提言」を震源としている。結論を言えば、この内容は「労使自治」「労使コミュニケーション」という美名のもとに、労働基準法を逸脱するデロゲーションを「法定基準の調整・代替の仕組み」と言い換えて、企業が職場を都合よく支配するための道具として機能させるものである。それは結局、労働条件決定の仕組みから労働組合を排除することにつながるものと言わざるを得ない。

岡崎進(ひょうごユニオン委員長)

兵庫の地域春闘の取り組みとしては、2月16日の「パートアクション」に続いて、3月8日に「兵庫たたら仲間集会」、3月12日に「春闘講演会」を実施する。現在の厳しい現状を打開するため、学び、行動する場としてぜひ参加してほしい。

春闘は働く人々が声を上げる最大の機会でもある。沈黙しては、くらしも労働条件も良くなり、大企業と投資家はかりが潤う歪んだ構造は変えられない。企業の壁を越えた労働者のつながりと闘いが今ほど求められている時はない。

川総合庁舎1階講座研修室◎映画「決断」上映と兵庫原賠訴訟原告の方のお話◎参加費1000円◎主催 川脱原発はりまアクション

■未来を築く働き方と賃上げを！2025兵庫たたら仲間集会 ◎3月8日(土)13時30分◎神戸市・中央区文化センター・1階多目的ホール◎闘いの報告と記念講演(終了後デモ行進)◎主催 集会実行委員会

■緊急！3・1斎藤知事の辞職を求める西宮集会 ◎3月1日(土)14時◎西宮市立若竹文化会館(若竹公民館)◎主催 川

改憲の動きをウォッチング

■沖縄と日米首脳会談 辺野古新基地建設の着実な推進 南西諸島の実践的な訓練の強化

前号で、南西諸島の要塞化や軟弱地盤が広がる大浦湾の基地建設問題について触れたが、石破首相とトランプ米大統領の初めての会談が2月8日、ワシントンで行われた。安全保障分野で日米の連携を一段と強化する方向が示されている。過重な基地負担を押しつけられるのは沖縄だ。

国土面積の約0.6%しかない沖縄県には、全米の米軍専用施設面積の約7割が集中している。日米首脳会談による負担の拡大や危険の増大につながるのではないのか。

会談後に発表した日米首脳共同声明は、「日米同盟の抑止力・対処力をさらに強化していく」と宣言。そのため、「自衛隊及び米軍のそれぞれの指揮・統制枠組みの向上、日本の南西諸島における二国間のプレゼンスの向上、より実践的な訓練及び演習を通じた即応性の向上」などを明記した。

また、共同声明は辺野

古新基地建設の「着実な実施が極めて重要であること」を強調した。さらに共同声明は、「米国の好ましい傾向により加の好ましい傾向により下支えされた、2027年度までに日本を防衛する主たる責任を確保すること、そして、この重要な基盤の上に、2027年度より後も抜本的に防衛力を強化していく」ことをトランプ米大統領が示している。過重な基地負担を押しつけられるのは沖縄だ。

023年から27年までの5年間で43兆円とする岸田内閣の閣議決定を超えて27年以降も軍事力を抜本的に強化することを約束した。国会の議論も経ず、石破首相の一存による暴走だ。

琉球新報社説は、「辺野古新基地建設をはじめとする過重な米軍基地の負担に加え、自衛隊の南西シフトによる軍備増強が進む。南西諸島が米中対立の frontline となり、不測の事態で戦場が生じかねない危険性が増している」と「日本が米国にくみして中国との覇権争いを助長すれば、沖縄が戦争に巻き込まれるリスクは高まる」と訴える。

■被曝80年国際市民フォーラム 核禁条約締結国会議に提言

被曝80年にあわせて被爆者や市民などで行く団体「核兵器をなくす日本キャンペーン」は2月8日と9日、国際市民フォーラムを東京で開き、3月に行われる核兵器禁止条約第3回締約国会議に提出する提言案をまとめた。

提言案では、原爆や核実験による被害者の援助や環境への影響について議論を進めていくことや、条約の影響力をさらに高めていくために核兵器に依存する国々との協議の場を設けて、核兵器の非人道性や核抑止政策の危険性を伝えることなどを求めている。

日本被団協の田中照日代表委員は「若い人たちがもたくさん関わってくれて被曝80年の運動のすばらしい出発点になった」と語っている(NHK)。

核禁条約の署名国は94カ国。国連加盟国の半数に迫り、締約国は73カ国。政府は米国の「核の傘」への依存をやめ禁止条約に参加すべきである。(中)

津久井進弁護士が講演 デマと脅迫から民主主義を守る集い

昨秋の兵庫県知事選をきっかけに、県議会「調査特別委員会」(百条委員会)メンバーに対するSNSによる大量のデマ、誹謗中傷や脅迫などの攻撃が選挙後も続いており、一人の元県議が自死するという痛ましい事態までも起きている。こうした民主主義破壊と人権侵害の行為を許さない、「百



集いには会場超満員となる220人が参加してSNSによる民主主義破壊と人権侵害の問題を考えた。写真内は津久井進弁護士＝2月13日、尼崎市

条委員会を守る市民の会」が2月13日、尼崎市内で「デマと脅迫から民主主義を守る集い」を開き、会場超満員の約220人が参加した。

津久井さんは、今回の県知事選は、都知事選や米大統領選などと共通する「ウェブポピュリズムの台頭」が特徴だとして、古代ギリシャ時代から不変の本質的構造と変わらないと紹介。本質を知る格好の題材として、絵本『二番目の患者』(2014年発行)を読み聞かせた。ただそれでも、県知事選の期間中、SNSなどのデマや名誉毀損行為を目の当たりにしても、「そのうちみんな分かるだろうと、自分から何も言わなかった。対抗言論の価値を低く見すぎていた」と悔んだ。

そして、実はSNS利用者には高収入の男性中間管理職層が多く占め、実名で誹謗中傷の投稿をする人も多いなど確信犯的であることから、「法律的に『規制』すればなくならない」と話した。

「こうなったら大変。やはり、落語を聞き、笑いながら社会問題を考えようの憲法カフェの第2弾「やっぱり今までの保険証が便利じゃない？」を1月26日に開催。約30人が参加した。

落語を演ずるのは都亭アロハさん。昨年3月の「落語でわかる介護保険が好評で、再登場。マイナ保険証のトラブルシューティングが次々として出てきて、笑いながらも

は、ひとつひとつ自分で事実検証に手間暇かかる新聞だけに頼ってはいけない。自分自身で投稿内容の真偽を検証し判断すること。おかしい内容に

「誰でも安心して使えたこれまでの健康保険証がやっぱり便利やん」と確認した憲法カフェだった。(佐野みさ子)

「特別注視区域」への指定など基地強化と監視体制の強化が進む一方、米軍関係者による交通事故多発、発電機騒音被害など、住民の「安心・安全」を脅かす事態は今も続いている。

マイナ保険証問題で憲法カフェ 憲法を生かす須磨区の会

「こうなったら大変。やはり、落語を聞き、笑いながら社会問題を考えようの憲法カフェの第2弾「やっぱり今までの保険証が便利じゃない？」を1月26日に開催。約30人が参加した。

落語の後は元神戸市職員山田誠一さんから「マイナ保険証問題を考える」と題したお話。住

基カードがあまり普及しなかったことからマイナカード制度ができたこと、マイナカード普及の目的、マイナ保険証「一本化」の問題点、昨年12月で新規の健康保険証が発行されなくなるとその後どうなるのかなど具体的なわかりやすい解説があった。

参加者ではマイナカードを持っていない人が過半数あったが、マイナ保険証利用者は少数だった。参加者の一人は「周りが使っていたので遅れないようにと使い始めたが、こんなに問題の多いカードだとは知らなかった」

政府の戦争準備政策として、近畿でも自衛隊舞鶴基地所属のイジス艦へのトマホーク搭載計画、京都府精華町の祝園ミサイル弾薬庫建設、そして、京丹後の米軍Xバンドレーダー基地の強化と、一段と基地の強化・固定化が進んでいる。

「備える」が基本ではないか。労働者に寄り添えているのか、寄り添うとは何か、いま一度考えることから始めることが、「伝える」ことにつながるのではないか」と言われた。

振り返ると、私はいつもユニオンに寄り添って暮らしていた。職場でイジメられたら事務所に行ってグチを聞いてもらい、退職に歯止めをかけるこ

地域ユニオン あちこちあれこれ

阪神・淡路大震災から30年。私のユニオン運動も30年になる。あのとき震災がなければ、私は

労働組合とは無縁で、全く違う人生を歩んでいただろうと思う。違う人生を味わってみたいかと思うが、今の自分に後悔はない。ユニオンでたくさんの人と出会い、モノを見る目を養ったことは、私の宝物になった。

震災から30年の節目、あの当時のユニオンと地区別の活動を風化させず、伝えたいと考えた。当時、これまで日本の労働運動

で誰もやったことがない活動に着手した。震災を理由にした解雇や便乗解雇。電話一本、ハガキ一枚で簡単に解雇されるパ

ートやアルバイトを対象に労働相談の窓口を開設したことは、私たちが誇れる活動であり、その後30年活動を続ける原動力になった。労働組合が

た地区別の前事務局長に、あのとき被災者でありながら労働者のセーフティネットの役割を果たそうとしたこと、未経験の活

動をしようと思った。そのことを伝える集いを開きたい。

その30年の節目にこれまでのことを伝える集いを開きたい。

当時の私は「相談者の一人」だった。当時の相談活動の中心を担っていた『寄り添う』『伝える』

「伝える」が基本ではないか。労働者に寄り添えているのか、寄り添うとは何か、いま一度考えることから始めることが、「伝える」ことにつながるのではないか」と言われた。

私のユニオン運動の原点

「備える」が基本ではないか。労働者に寄り添えているのか、寄り添うとは何か、いま一度考えることから始めることが、「伝える」ことにつながるのではないか」と言われた。

振り返ると、私はいつもユニオンに寄り添って暮らしていた。職場でイジメられたら事務所に行ってグチを聞いてもらい、退職に歯止めをかけるこ

集いは4月27日に開く予定。これから起こる災害に、ユニオンが労働者のセーフティネットであり続けることを伝えたい。木村文貴子(神戸ワー

「誰でも安心して使えたこれまでの健康保険証がやっぱり便利やん」と確認した憲法カフェだった。(佐野みさ子)

こうした中、米軍Xバンドレーダー基地反対近畿連絡会は2月2日、京都市内で恒例の旗開きを開催した(写真)。冒頭、大津宗則代表世話人が「沖繩や韓国では民衆がリスクを冒して頑張っている。私たちももっと本気になって闘う戦線を作

建設から10年を経過した米軍Xバンドレーダー基地をめぐっては、日米韓のリーダー情報の即時共有開始による機能強化、日米共同軍事訓練の拡大・強化、土地利用規制法にもとづく基地周辺の

「特別注視区域」への指定など基地強化と監視体制の強化が進む一方、米軍関係者による交通事故多発、発電機騒音被害など、住民の「安心・安全」を脅かす事態は今も続いている。

こうした中、米軍Xバンドレーダー基地反対近畿連絡会は2月2日、京都市内で恒例の旗開きを開催した(写真)。冒頭、大津宗則代表世話人が「沖繩や韓国では民衆がリスクを冒して頑張っている。私たちももっと本気になって闘う戦線を作

米軍Xバンドレーダー基地反対近畿連絡会 が京都で旗開き

2.2



建設から10年を経過した米軍Xバンドレーダー基地をめぐっては、日米韓のリーダー情報の即時共有開始による機能強化、日米共同軍事訓練の拡大・強化、土地利用規制法にもとづく基地周辺の

「特別注視区域」への指定など基地強化と監視体制の強化が進む一方、米軍関係者による交通事故多発、発電機騒音被害など、住民の「安心・安全」を脅かす事態は今も続いている。

穴栗で「戦雲」の上映会

九条の会・穴栗が主催

九条の会・穴栗の主催による、三上智恵監督の「戦雲」上映会が2月2日、穴栗防災センター・シアターで満席になる中、開かれた。

日米両政府。その島々で抗いつける人々。苦しい状況にもかかわらず、国策に抵抗し、声を上げる人々。参加者は、映画から伝わるそうした芯の通った人々の生き方に心を打たれた。

また、全国の空港・港



三上智恵監督の「戦雲」上映会には満席となる参加者があり、南西諸島の軍事要塞化をめぐる攻防を観た＝2月2日、穴栗市

「特別注視区域」への指定など基地強化と監視体制の強化が進む一方、米軍関係者による交通事故多発、発電機騒音被害など、住民の「安心・安全」を脅かす事態は今も続いている。

こうした中、米軍Xバンドレーダー基地反対近畿連絡会は2月2日、京都市内で恒例の旗開きを開催した(写真)。冒頭、大津宗則代表世話人が「沖繩や韓国では民衆がリスクを冒して頑張っている。私たちももっと本気になって闘う戦線を作

若者のひろば

1989年、平成のスタートの年、私は、バブルの崩壊とともに生まれました。

生きてきて、景気の良い日本を知らないし、上の世代からは「ゆとり世代」と小馬鹿にされ、就職活動中にはリーマンショックが直撃し、有効求人倍率は0.5倍でした。その度に卑屈な気持ちで生きてきたように思います。

そのような嵐の中、私は幸いにも就職をすることができましたが、周りを見渡すと、仕方なく非正規雇用で働く者、ブラック企業で使い捨てにされる者が多くいます。そして、世間からは今のうちに「若者の声を聞け」という声も大きくな、「自己責任」の名のもとに切り捨てられました。そうした状況で、この世代は政治や社会に対して「怒り」よりも「諦め」の気持ちを持っている人々が多数のように思います。

そうした中で、「敵」を作ったうえで、「手取りを増やす」「消費税をゼロにする」などの心地よいフレーズを言ってくれる国民民主党やれいわ新選組に一定に支持があるのは、私自身も支持はしません。「絶望から救ってくれる救世主」のように

映っていることは理解できません。しかし、それらの主張の裏でなにを考えているかをよく汲み取る必要があるように思います。

例えば、2023年11月1日に、国民民主党の玉木雄一郎は、X(旧Twitter)で「診療報酬を減らして医者の給料を減らしたい」(現在は

人生、誰しもがいつかは病気になるかもしれせん。2人に1人はガンになる時代。また、いつかは心の病気になるかもしれせん。事故に遭い、動けなくなるかもしれせん。そして、働けなくなり、困窮するかもしれせん。生活保護を受けるかもしれせん。その当事者になる可能性は誰にでもあります。

人は一人では生きられません。そのための「公共サービス」ではないのではないのでしょうか。

私たちが当たり前のように飲んでいる水や、安全な道路、移動手段としてのバス、教育で使う教科書や、病気やケガをしたとき・予防のための医療、安心して暮らしているための介護、犯罪に巻き込まれないための治安の維持など、生きていくために必要不可欠な公共の役割は多いです。

新社会党のホームページを開けると「あなたが尊重される社会」というフレーズが出てきます。私はとても良い言葉だなと思いました。

◆ 分断・対立からの転換として、「人が尊重される社会」へのビジョンを示していただけることを期待します。

(吉野冬詩)

減税ブーム、それ、正しい?

要するに、「社会保障費を削る分、減税します」ということですが、極めて危険な発言です。このような「分断」と「感情の社会」に乗っかる政治家が出てきたことも憂慮しなければいけないことです。

削除」と発言し大炎上しました。

◆

『武器としての国際人権 日本の貧困・報道・差別』 藤田早苗著／集英社新書／1100円(税込)

兵庫県知事選におけるN党の言いいたい放題は、報道の自由を侵害する権利なのか。その間に、委縮した報道機関の情報提供はどうであったのか。トランプ大統領は、ガザの住民をヨルダン、エジプトへ移住させ、その地をリゾート地にすると言ったが、イスラエルのジェノサイドに同調し、また、国内の不法移民を強制帰国(軍用機で本国に移送)するのは人道的にも許されない人権無視である。

日本の外務省は、「男系男子」皇位継承について国連の女性差別撤廃委員会が改定を勧告したことへの抗議として、日本の拠出金の使途からの除外を決めた……。今日、人権問題を

語るには材料は事欠かない。そんななかで興味深い本を知った。本書では、

①人権とは何か、②国際人権をどう使うか。

本棚

改めて人権の問題を考える書

第2部は、「国際人権から見た日本の問題」で、③最も深刻な人権侵害は貧困、④発展・開発・経済活動と人権、⑤情報・表現の自由、⑥男性の問題でもある女性の権利、⑦なくならない入管収容の人権問題、となっていて多岐にわたる人権をめぐる問題が述べられてい

断をする。それは、死ぬときを自分で決める安楽死の選択だった。そのためにネット上で違法な薬も買い求めた。あと必要なのは、すぐそばで自分の死を見届けてくれる誰かを作ることだった。題名のとおり、その日が来るときに隣の部屋にいてほしい」と頼まれたイングリッドは、戸惑い迷った末、マーサの最後を見届ける決心をする。

ザ・ルーム・ネクスト・ドア

年が明けて、近親者の訃報がもたらされた。お通夜から葬儀への2日間、亡骸と共に過ごし、死について考える日々を送った。私自身、父親が他界した69歳の歳を今年迎える。遠くにあった死が近景へと迫ってきた感覚を覚える。死をテーマにしたこの作品に出会ったのは、このタイミングだった。

映画は、作家イングリッド(ジュリアン・ムーア)のサイン会から始まる。会場に友人から以前一緒に仕事をしていた戦場ジャーナリストのマーサ(ティルダ・スウィントン)が癌で闘病中であることを聞かされ、イングリッドは40年ぶりに彼女に会いに行く。病室での2人の会話から、娘との確執やその父親のことなど、マーサのこれまでのことが明らかになっていく。

新しいがん治療に期待し、前向きに闘病生活を送っていたマーサだったが、治療に効果がないと分かったときに、ある決

断をする。それは、死ぬときを自分で決める安楽死の選択だった。そのためにネット上で違法な薬も買い求めた。あと必要なのは、すぐそばで自分の死を見届けてくれる誰かを作ることだった。題名のとおり、その日が来るときに隣の部屋にいてほしい」と頼まれたイングリッドは、戸惑い迷った末、マーサの最後を見届ける決心をする。

思い出が一切ない所がいいとマーサが借りた森の中の貸別荘で、2人の生活が始まる。「ドアを開けて寝るけれど、もしドアが開いたら私は

鬼気迫るものがあった。

本の自由のほか、移動、表現、思想等の自由や、権利については財産、集会、結社、食糧、教育等の人権など、社会的、経済的、文化的権利などの社会的規約が謳われている。

何と云っても、人権の最重要課題は、生存が脅かされることがあってはならないということだ。しかしながら、生存の危機という点では、憲法25条で保障された文化的生活を下回る状況下の貧困、グローバルサウスでの

温暖化の影響、各種差別、ジェノサイドが実際に存在する。また、この機会に改めてジェンダーやLGBTなどについても考えてみてはどうだろうか。

著者の藤田氏は法学博士。イギリス・エセックス大学人権センターフェローであり、日本とヨーロッパを行き来して、国連の機関を通じた人権活動を行っている。1月の中旬に

垂水であった著者の講演会の会場での著書を購入した。

ただ少し気になる点がある。一つは、「国連書簡(中略)一方的ではない」としながらも、「報告者は『王冠に載せる宝石』として重要な位置にあり、他国は真摯に向き合っているが日本は軽んじている」と言うような、国連人権機関を絶対化している点と、講演での聴衆は日本が他との比較で劣っていたりすると(例えば資料での数字等の比較でも)変に納得する傾向がある、と言ったのだ。

二つ目は、人権には歴史があり、また、冒頭部分で述べたような政治・経済状況で揺れ戻しが度々起るように、歴史・政治・経済が人権に深く関わっているのだが、その点の考察があまりなされていない感がある。

最後に一言。世界全ての人が生存・生活を脅かされることなく、人権を主張する必要のない世界を目指そう。

(菅沼祥三)

24年のベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞



映像も美しく、縁どられ たニューヨークの街並みの風景が目を和ませた。

監督ハドド・アルモドバルノ2024年ノス페인ノ107分

家の中の家具や調度品、女性2人の服装にも監督のアルモドバルのこだわりが見られ、そのカラフルな色合いは暗くなりがちなテーマを明るく演出していたように思う。

逃れられない死に臨んだとき、自分に果たしてどういう行動や感情が起ころうか。マーサのように深く死と向き合えるだろうか。しかし、彼女も一人ではなく最後に一緒にいてくれる人を望み、イングリッドがいたからこそ心穏やかに最後を迎えられたのだ。家族でも友人でも、誰かに見守られながら死ぬことができれば幸せだと考えた。

(W)